【 4 】

氏　　名	河内良弘（かわち よしひろ）
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第162号
学位授与の日付	昭和59年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	明代女真史の研究
論文調査委員	（主査）教授 萩原淳平　教授 谷川道雄　教授 竺沙雅章

論文内容の要旨

女真族は東北アジア（旧満州）に住んだツングース系の民族であって，古くは金王朝を建てて活躍したが，元王朝以後はふるわず，現在の黒龍江省南部・吉林省地方に分布し，明代に入って明国および朝鮮に服属するようになった。本論文は明一代の女真族の歴史を考究したものである。行論の都合上，本論を二分し，前編には明初から天順年間，すなわち朝鮮では国初から世祖年間に到る時期を，後編にはそれ以後の時期を論じてある。しかしこの要旨においては編および章に分けず，一括して論述した。

明の太祖は外国貿易に消極的であったが，成祖永楽帝は対外政策に意慾を燃やし，女真に対しても招撫使を送り服属を促したので女真人が来朝するようになり，明末に到るまで総計384の衛が設立された。女真人は明国への定時朝貢が義務づけられ，朝貢時にのみ貿易がゆるされた。しかし馬以外には有力な商品はなかったので，明代前期の女真の対外貿易に活況はなかった。

1392年，朝鮮国が成立すると，女真人は朝鮮王京にも来朝するようになった。朝鮮国は女真とは互恵平等の立場をとらず，女真を外夷・禽獣・野人（原始人）などと称して蔑視し，朝鮮と女真との関係を明国と女真とのそれになぞらえ，宗主国と朝貢国との関係に保とうとした。女真人は朝貢の形式にしなければ朝鮮に入国できず，公的に貿易を営む機会も得られなかったから，服属の形式をとるのもやむを得なかった。しかし馬も朝鮮では高く売れなかったので有力な商品になり得ず，明代前期では女真の対朝鮮貿易にも活況はなかった。

朝鮮王国では創国以来，朝鮮東北地方の女真の地を自国の領土として占有し，同地方の女真人を自国に帰属せしめようとして来た。しかしこの地方は古来から嘗て朝鮮国人の領土であったことはなく，金代以後は女真人の故郷であった。しかるに朝鮮国は明国との外交交渉の結果，この地方の大部分を朝鮮国の領有に帰せしめた。このためこの地方に住む女真人すなわち建州左衛人や毛鄰衛人は，身分的には宗主国たる明国に帰属しながらも，しかも明の冊封国たる朝鮮国領土内に寄留するという異常な事態が生じた。特殊な環境に立たされることとなった女真人と朝鮮国との間に政治的葛藤がつづき，建州左衛は遼東地方に逃避したが，残留した毛鄰衛人等はしばしば朝鮮の迫害を受けた。

一方，建州女直の中でも李満住の率いる建州衛は，永楽22年（1424）以来婆猪江流域に住んでいたが，宣徳8年海西女直が朝鮮に侵入したことから誤解を受け，朝鮮軍の出兵攻撃を受けた。明国に所属する衛所への攻撃は，とりもなおさず明国への攻撃であるはずであるが，実際には女真の衛所が他国の攻撃を受けても明国は保護を与えようとはしなかった。したがって建州衛としては外国と独自の外交関係を樹立し国際関係を調節するほかなかった。朝鮮に対し人質を送るなどして，服属の礼をとったのはこの為である。朝鮮国にあっても歴代の国王は女真とは対等の立場すなわち敵国抗礼の立場に立たず，女真と外交関係を開くのは，女真人が朝鮮国王を君主と仰ぎ，事大の礼を尽した場合に限られた。両者が対等の立場に立ち公然と貿易関係を開くことは考えられなかったし，たとえ幸に外交関係が開かれた場合でも，冊封国間の私交を禁じている明国からの強い批判を避けることはできなかった。明代を通じ女真人が公然と対朝鮮貿易に従事できる国際的環境はなかった。後年女真と朝鮮との間に，貂皮をめぐる私貿易が発達するのはこの理由からである。

明初以来天順年間に到るまでの女真から明国への主要な貿易品は馬であった。しかし成化年間に入り貂皮が重要な商品として登場した。貂皮貿易は明国や朝鮮の需要に促され，明末に到るまで順調に発展した。

女真人が貂皮の見返りとして輸入した主要商品は鉄製農具と耕牛とであった。貂皮貿易の展開は海西女直や建州女直の社会を，より充実した農耕社会に変える役目も果たした。また貿易路上の各地に女真商人が成長した。嘗ては部族の下級成員であった者が，長年の貿易によって富を蓄え，部族の長者にのし上る者もあった。明代中期から末期にかけての女真社会では，貿易によって富と武力を蓄えた新興の政商等により，政治的秩序の再編成が行われていた。

成化年間以後，毛皮貿易がさかんになると，それまで奥地にいた女真人が毛皮動物を追って朝鮮近地に姿を現わし，或は朝鮮近辺の女真人も狩猟地を移すなどして朝鮮と紛争をおこし，朝鮮の出兵を誘った。弘治4年（1491）2万の朝鮮軍は東京城に出兵して尼麻車兀狄哈を撃ち，嘉靖3年（1524）李之芳等の率いる朝鮮軍は閭延・茂昌に出兵し，嘉靖31年（1552）には草串に出兵した。出兵のたびに女真村落は焼かれ被害を蒙ったが，朝鮮軍も寒気その他の為に損害を受けた。

成化3年（1467）および成化15年（1479）の両度にわたり，建州女直は朝鮮と明国の出兵を受け，村落を焼かれ人々は殺され，はかりしれない災厄を受けた。戦乱の後，建州女直の支配者層の統制力は衰え，部下の逸脱行為にも断固たる指導を行う権威を失っていた。そしてこの頃から『領兵人には非ざる微者』が主体となり，衛の首長の制止もきかず，朝鮮北辺や遼東地方で横暴を働くようになった。そして明末になると，彼等は長年にわたる蓄積により武装を強化し，新鋭の火器をも導入し，外国の軍隊と対決する姿勢を示しはじめた。

成化年間以後，建州三衛の首長層の勢力は次第に凋落したが，正徳年間末頃から建州三衛の首長とは家系上の系譜が連なるかどうかあきらかでない者が多数，三衛都督と称して明国に来朝するようになった。建州女直以外でもこうした現象がおこっており，かつては弱少な衛の首長であった者が，都督に任命されるようになった。こうした現象はこれまでのあり方と較べると異常であるが，こうした微賤の者が抬頭するようになったのは，貿易の発展が原因である。

先に述べた如く成化年間以後毛皮貿易がさかんになると，東北アジア・シベリア地方から明国および朝鮮に到る貿易路上に数多くの商人が現われたが，中でも最大の富をなしたのは明国との境界地方，すなわち開原に接近した地方の商人達であった。彼等は貿易路上の要衝に地を占め，商品を集散し巨富を積んだ。彼等は貿易で得た財力で耕地を拡げ私兵を養い土着的政商にのし上った。彼等の中には明国に阿附して勢力を得た者もあったが，民族主義的意気に燃えた政商も抬頭し，しばしば明国と衝突し，失敗した。そして次第に彼等の間では，部族間の葛藤を治め，国際的地位および貿易上の不安定を克服するといった懸案を解決するために，諸問題に対応し得る政権を組織することが共通の輿望となっていた。清朝の開祖ヌルハチの登場は，かようにして時代の輿望をになったものであった。

論文審査の結果の要旨

本論文は，かつて金朝を建て北アジア・華北に君臨した女真族が，元朝崩壊ののち現在の黒龍江省南部や吉林省などに分布し，明国や朝鮮国に服属しながら約3世紀後に清朝を建てるまでの歴史を，政治・経済・社会などの面から総合的に研究したものである。

明代の女真史については，これまでに地名考証を主とする歴史地理的研究や紛争事件の解明を中心にした政治史的研究は行われてきた。ただ一般的に言えば，北アジア民族に関する研究は，彼らが中国に進入し君臨した時代については資料も比較的多く，研究も進んでいるが，彼らが北アジアに在る間に関しては資料の制約もあって困難な場合が多い。特に北アジア民族が少数にも拘らず，中国に進出し多くの漢人を征服するまでの原動力が何んであったか。また，その原動力の形成過程の仕組とか構造がどのように変っていったかという問題は，北アジア民族研究の最も大きな課題の一つである。本論文の筆者は，これらの問題を踏まえて，清朝を建てた女真族の明代における研究を前後2編に分って論述した。

前編「明代女真の対外関係と貿易」の中で筆者は，女真人をめぐる環境を明国と朝鮮国との関係において総合的に論じ，つづいて「建州左衛の対外関係」・「李朝初期の女真人侍衛」・「海西女直の対外貿易」など6章に分って各論的に分析した。

これらの中で，例えば，朝鮮の世祖が「字小之義」にもとづいて，女真人の来朝を促し貿易の活発化をはかった。しかし，この事が明国に知れ，叱責されて，たちまち両者の交通が禁止された。筆者は，これらの具体例をあげて，大国である明国と，明国に朝貢の立場をとる朝鮮国との狭間にあって，弱小の女真人が，複雑微妙な国際情勢のゆれ動くなかで翻弄され，苦境を脱出できず，活路を見いだせない様子を『李朝実録』を中心に克明に追究した。この点は従来の研究を一歩も二歩も進めたといえよう。

後編「貿易の発展と新勢力の抬頭」では，建州女直の農業，狩猟地をめぐる紛争，更に土産・婚姻・樹上葬や奴婢の解釈などにも触れて女真社会の研究を進めた。

なかんずく，後編の圧巻は，「明代東北アジアの貂皮貿易」と「建州三衛の新勢力の抬頭」の2章であろう。筆者は，前者で貂皮が明国では初め高級官僚にのみ着用を許されていたが，政治の安定と経済の繁栄に促されて，下級官僚や庶民にまで着用された事を述べた。ついで，朝鮮でも約10年おくれて貂皮着用の風習が明国から伝った。特に朝鮮では，貂皮着用が流行し，若い婦女子が会合で貂皮を着用していないと恥と思ったという資料まで示し，貂皮使用の盛況を詳しく実証した。

この両国の情勢に，貂皮の特産地である女真人居住区は俄かに活況を呈し，貂皮貿易の利益による波及効果は，女真商人の成長と貿易による見返りで農業の発展をもたらしたと結論づけた。

後者において筆者は，貂皮貿易の活況によって，一面では貿易摩擦も種々な面にあらわれたが，女真人はそれらを克服し，貿易の波及効果が時代を降るに従って多方面にわたり，特に商人層の富強と，新興の武装集団の明国との境界地方での活躍に注目した。

最後に，清朝の開祖ヌルハチは，部族間の葛藤を治め，国際的地位および貿易上の不安定を克服するための強力な政権を樹立するという女真族共通の輿望をになって登場したと結論づけた。

ところで，本論文は女真人自身が殆ど記録を残さなかった時代について，『李朝実録』や『明実録』などの零細な関係資料を徹底的に収集分析した。また，これまでの歴史地理的研究や政治史的研究をこえて，15世紀後半以降の貂皮貿易の急激な発展を女真族の転換期として捉えたこと。この貿易の波及効果を基盤にして，東北アジアに偏在した少数の女真人がやがて清朝を建設し，中国全土を支配する大帝国に発展するまでの原動力の，形成過程における仕組とか構造を明らかにした独創的な見解は高く評価されよう。

しかし，本論文は明代に限り，元代の女真について触れていないのは，明代初期の女真の理解のために惜しまれる。また，女真をめぐる国際関係を明国と朝鮮国に限っているが，モンゴルとの関係にも視野を広めたならば，より適切な解釈がえられたであろう。そのほか，前編では叙述に冗長な箇所が見受けられるが，それらの欠点も本論文の価値を損うほどのものではない。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認められる。

昭和59年２月３日論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。